

3460 地球の香り 「青の世界」：状況と心模様②

この作品の向こうに広がるのは、インド洋！
表現する、ふさわしい言葉が見つからない。例えられない色彩。
渚^{なぎさ}に打ち寄せる波音が、耳に心地よく響く^{ひび}。

あまりの見事さに、ため息をつくことも忘れて、ただただ見とれる。

80 マイルビーチ（約 128 キロメートル）
右を見ても、左を見ても、どこまでも延々と海岸線がつづく。

眼前にある光景は、天竺^{てんじく}までつづいているのか。
現実のものとは思えないほど… 光で色彩は変わる。その変化の多様さや面白さ。
砂浜で、時を忘れて楽しんだ。

最初は、どこかの島から流れ着いた木切れや藻。見るもの、触れるものが、皆珍しい。
寄せる波。引いていく波を追いかける。
まるで、子供時代のように、我を忘れて… 実に純粹になれる。

周囲を気にしては、こうは行かない。この後、裸足になって、沖に向かって、
行けるところまで行った。人が見ていれば、気が狂ったのではないか、
ショートパンツが濡れるのも気にならない。

現実感があやふやになる寸前まで行った。まるで、手招きされているような錯覚。
この美しさは、それほどまでに純粹で、現実離れをしていた。
時折、大きな波が打ち寄せる。ふと、我にかえった。一発波もありうる。

この 80 マイルビーチ、帰路に訪ねる選択肢もある。
未練が充分にある魅力的な海岸線である。先を急ぐ旅ではないが、
先も楽しみ、立ち去ることにした。

元に戻る。駐車した場所に戻るのが一苦勞だった。同じような景観、道標もない。
自分だけの目印はしていたが、広大すぎて目立たない。
ガソリンスタンドは、もうクローズしているだろう。次の街までは相当な距離がありそうだ。

いつもながら、海外では慎重な^{くらく}久楽、水や食料など最悪を想定して準備。
想定外のことが起こるのも世の中。うっかりもうっかり、車のある場所に戻れない。
まだ、^{あせ}焦りは出ていない。我を忘れて遊んでいたのが原因。

まさに、偶然の遭遇。目をこすった。^{はる}遙か遠方に米粒のような人影、人間様の登場。
思えば、あの方向だったかもしれない。実にあやふや。
海岸線からは、何も見えない。確かめると、マイカーが見つかった。

実にドジな話。行き交う人もないと思い込んでいた。なんともラッキー。
そんなの当たり前、ここオーストラリアでは、当たり前はない。
それほど広大で、同じ景観。うっかりしてしまう。

この体験が、あとの旅にも大変役立ち、今一件の出来事を除けば、無事な旅が楽しめた。
言葉では、油断大敵。しかし、現場では真剣勝負。
道標がないということ。こうした僻地に来ると、錯覚が生じる。

米粒ほどの人影、近づくにしがって、男女二人と判明。

どんな人たちだろう。どこから来ているのか。

人恋しい時間帯になってきている。話もしてみたい。情報も得たい。

遠くからの雰囲気では、友人同士のように感じた。

距離を置いて海辺に。二人の歩みは、ゆっくりとなり、感動しているよううしろ姿。

二人に距離が接近してきた。どちらからともなく、自然に腕をくむことに。

二人の雰囲気は邪魔ができないほどのムードに盛りあがった。

そういえば、恋を語るに最高のシュチエーション。インド洋に向かって歩くだけで

恋が芽生える雰囲気。至福の時なのだろう。邪魔するは野暮。

友人関係が、恋人関係になるチャンスかも。恋はムードが大切。私にまで、伝わってくる。

4本の足が、2本になるタイミングで、シャッターを押した。

そして、声をかけず、立ち去ることにした。

あの二人は、どこから来て、どこに行ったのだろうか。どこかで会えるかと思ったが、

再会できなかった。映画のような、現実離れをした素敵なワンシーン。

地球上のどこかで幸せな生活をしているだろう。

